

夏緑広葉樹自然林の鳥相

— 林相と季節分布 —

九州大学農学部 薩 孝夫
高鍋農業改良普及所 吉村 豊

宮崎県東臼杵郡椎葉村に所在する九州大学宮崎演習林の鳥類について1987~'89年に調査を実施し、79種の生息を確認した。このうちの48種が記録された三方岳自然林保全区における12回のラインセンサスの結果について報告する。

1. 調査方法と調査地の概況

調査は1988年8月から'89年7月にかけて毎月下旬の午前中に行なった。三方岳研究歩道の広野入口から三方岳山頂を経て広野に戻る周回コース7.2kmを、原則として時速2kmで歩行しながら、左・右それぞれ25m、計50m幅の調査帯に出現する種と個体数を、鳴声と目視観察(必要に応じて双眼鏡使用)で確認した。調査帶外で確認できたものは種名のみを記録した。

調査コースは、植生や環境の違いから、①針葉樹人工林のモミ・ツガ林を含む河畔林(A区、3.8km、標高1,070~1,200m)、②ツガ・コウヤマキなどを交えるブナを中心とした尾根部の夏緑自然林(B区、2.4km、標高1,200~1,460m)、③アカマツを交えるミズナラ・シデ類を中心とした尾根部の夏緑二次林(C区、1.0km、標高1,200~1,400m)の3区に区分できる。

2. 調査結果および考察

三方岳で記録された種と個体数は表-1のとおりである。記録された48種を渡りの季節性によって分類すれば、留鳥25種(52.1%)、夏鳥12種(25.0%)、冬鳥11種(22.9%)となる。出現種数の季節変動を表したのが図-1である。種数は3月に最多の22種を記録し、個体数は4月・5月に多かった。優占種は、春~夏期(4~6月)ではウグイス・ヒガラ・ヤマガラと野性化したソウシチョウであり、冬期(12~2月)ではエナガ・ヤマガラ・ミヤマホオジロである。

上記3つの環境区分ごとに生息密度の季節変動を図-2に示した。B地区での変動が大きく、繁殖期の4~5月に高密度となって特に4月は1ha当たり4.3羽と突出する。A区は3者の中では最も安定している。

表-1 三方岳ラインセンサスで観察された鳥類

種名	(月)												合計
	'88 8	9	10	11	12	'89 1	2	3	4	5	6	7	
ツミ	+					3		+	1	3	2		6
コジュケイ							+	+	+		1		4
ヤマドリ					1		+	1		2			4
キジバト					1								1
オオバト	+		+							2	+		2
ジョウイチ									1				1
ツツドリ									+				+
ホトトギス										+			+
アマツバメ													2
ヤマセミ								+					+
アカショウビン										2			2
オオゲラ	+	+			4	+	2		1	1	1	4	7
コガラ	2	1						4	1				14
イワツバメ					10								10
キセキレイ	+	+							+	+			+
サンショウウクイ													3
ヒヨドリ						1		2					3
ヒレンジャク							10			+			10
カワガラス	3	1			1			1		1			7
ミソサザイ	1	1					3	5	3	3	2		18
カヤクグリ							1						1
コマドリ									1	1	2	1	5
リリビタキ							2						2
ジョウビタキ							3						3
トラツグミ												+	+
クロツグミ	+									3			3
シロハラ							+						+
ツグミ							4	1					5
ウグイス	6	2	4				1	5	13	21	16	16	84
センダイムシクイ								2					2
キビタキ													+
オオルリ													2
エナガ	13	2	4	25	16	14	7	4	5				90
コガラ	10	5	+	1			1	7	11	2	5	+	42
ヒガラ	19	25	2	5	3	5	2	12	20	16	2	5	116
ヤマガラ	5	12	20	10	11	2	10	45	20	2	8	6	121
シジュウカラ	8	6	3	7		1	1	5	7	8	3	8	57
ゴジュウカラ	1	2		3	1	1	1	3	3	+	1	2	18
メジロ	+				7		1						8
ホオジロ	+	+											+
ミヤマホオジロ							+	5	9				14
オジロ							+						+
クロジ									1				1
アトリ							6						6
ウソ									2				2
カケス	3	8	3	+		2	2	3	8	7	5	3	44
ハシブトガラス	+				2	+	+	2		10	23	7	101
ソウシチョウ	21	19	5	2		+				7	14		
個体数	92	83	58	39	50	54	44	77	105	95	62	62	821
種数	19	15	15	11	15	13	14	22	21	19	19	13	48

"+"は調査帶外で確認したもの

図-3・4は春~夏期と冬期における各3回の調査結果を、縦軸に個体密度(羽/10ha)、横軸に種を、個体数の多い順に配置して作成した鳥類群集曲線である。A区について2期を比較すると、種類にはほとんど差はない

が冬期に最上位種の優占度が突出する点に違いがみられる。B・C区では春～夏期に種数・生息密度とも大きく増加すると共に、上位4～5種の優占度が高くなるのが特徴である。

試みにShannonとWeaverの情報理論式による多様性の尺度 $H' = - \sum P_i \cdot \log_2 P_i$ を求めると、春～夏期でA区3.48, B区3.13, C区2.74となり、冬期ではA区3.26, B区2.01, C区1.00となる。

A区は渓流に沿った多様な林相をもつ地帯で採餌や営巣に適し、一年を通して比較的豊かな鳥相を擁している。B・C区は共に水場から離れた高海拔地であるが、この両者間では植生の自然性が高いB区の方が鳥相が豊かである。繁殖期にはカラ類を中心にB区の生息密度がA区より増えており、ここでは今回県内で初めてゴジュウカラの営巣が確認された。樹洞あるいは低木や笹に営巣する小型鳥類の営巣環境として、老齢夏緑林の価値の高いことが改めて確認できた。

以上、調査期間・方法とも未だ不十分であるが、九州のブナ帯で定期的に行なわれた調査例はほとんどないので発表した。現地で御指導下さった日本野鳥の会宮崎支部の鈴木素直支部長・猪崎隆氏、および専門的な御教示と子細にわたる校閲を賜わった九州大学農学部動物学教室の白石哲教授に謝意を表します。

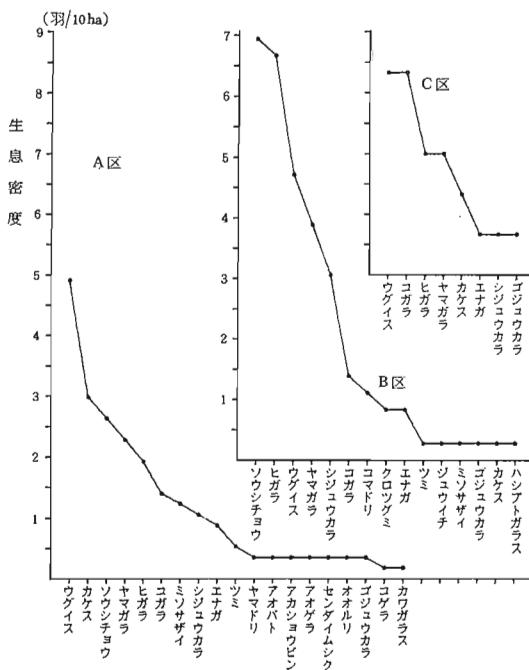


図-3 春～夏期における鳥類群集曲線

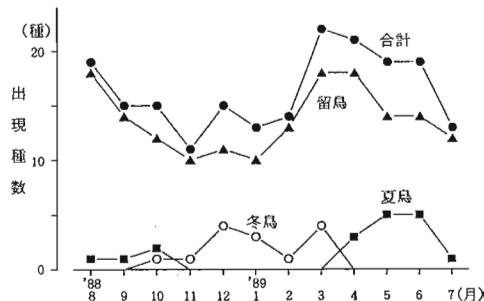


図-1 出現種数の季節変動

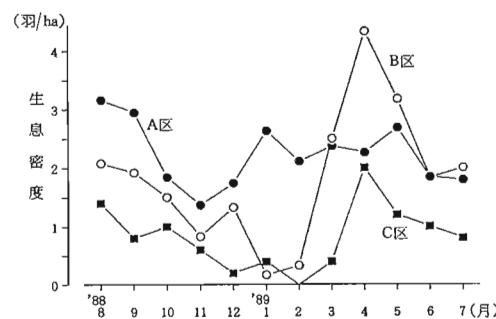


図-2 生息密度の季節変動

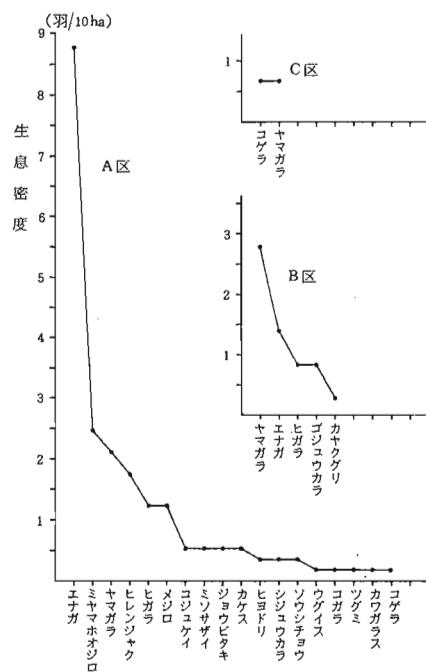


図-4 冬期における鳥類群集曲線